

特別企画 座談会

『現代インド地域研究』－課題と展望－

開始準備年度も含め6年間の予定で始動した『現代インド地域研究』プロジェクトも平成24年度で4年目に入った。各拠点の協力で実施されてきた研究会、シンポジウム、現地調査やさまざまな拠点整備活動の成果を踏まえた叢書出版の構想もかたちを整えつつある。

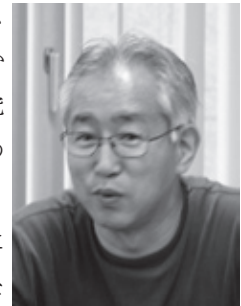
計画の中間地点を経過した今、プロジェクトの推進にあたってきた現代インド地域部会のメンバー（田辺明生、水島司、岡橋秀典、三尾稔、粟屋利江、長崎暢子、杉原薫、堀本武功、柳澤悠の9名。順不同、敬称略。）が、改めてプロジェクトの位置づけを検証し、現状と今後の課題について意見交換を行った。



（出席者）

- ・田辺 明生（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科教授）
- ・水島 司（東京大学大学院人文社会系研究科教授）
- ・岡橋 秀典（広島大学大学院文学研究科教授）
- ・三尾 稔（国立民族学博物館研究戦略センター准教授）
- ・粟屋 利江（東京外国語大学総合国際学研究院教授）
- ・長崎 暢子（龍谷大学人間・科学・宗教総合研究センター研究フェロー、東京大学／龍谷大学名誉教授）
- ・杉原 薫（東京大学大学院経済学研究科教授）
- ・堀本 武功（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科特任教授）
- ・柳澤 悠（東京大学人文社会系研究科次世代人文学開発センター研究員、東京大学名誉教授）

三尾 現代インド地域研究プロジェクトもちょうど折り返し点に差しかかり、そろそろプロジェクト全体として現代インド像をどのように発信していくかという点を煮詰める時期に来ています。そこで今日は、現代インド地域研究部会のメンバーにお集まりいただき、現代インドをどういう視点から、どのように把握していくかについて改めて意見交換しておきたいと思います。



このプロジェクトは、人文・社会科学の諸分野が共同して南アジア地域に迫るという試みとしては、『南アジアの構造変動』以来のプロジェクトになります。『南アジアの構造変動』からは約10年が経過し、その間に南アジアの状況も大きく変動するなかで、現在のプロジェクトが進んでいるわけです。

座談会の取っ掛かりとして、本プロジェクト全体のリーダーの田辺さんから、構造変動プロジェクトと現段階との違いをどのように認識しているか、まず概括的にお話いただければと思います。インド、南アジアにアプローチする問いの立て方そのものも、いろいろなところで変わってきていると思いますが、いかがでしょうか。

田辺 『南アジアの構造変動』プロジェクトは、1998年から4年間行われ、2002年に叢書が刊行されました。初めての学際的、総合的な南アジア地域研究プロジェクトということで、非常に画期的なものだったと思っています。当時は1990年代からの変化をどう捉えるかが主眼で、その視角は、私たちも継承していると思っています。特に計画から市場へ、あるいはナショナルからグローバルへという構造変動の潮流をはっきり打ち出していただいた。また、方法論や視角としては、政治と経済を統合的に捉える必要性、それから、環境やジェンダー、グローバルなつながりなどの新しいトピックを可視化していただいたこと、こういった点で重要な意味を持ったものだと思っています。



そこで提示された傾向性や視角を、我々はどう継承するべきでしょうか。まず現実の方は、グローバル化の進展のなかで政治経済的な活況が実現しているということがよりはっきりしてきました。それだけではなく、市場やガバナンスというものが草の根まで浸透していくなかで、農民、低カースト、女性、そのほかのマイノリティーが主体となって経済活動や政治の領域に参加して声を上げるようになった。つまり、グローバル化の動きと連動した下からの民衆の主体化というのが相当進展してきているように思われます。

『南アジアの構造変動』のときには、ナショナルかグローバルか、計画か市場かといった二項対立があったように思われますが、現在はそうではなく、グローバル化と下からの民主化が両方連動しながら起こっていることがはっきり見えるようになってきたのではないかと、私は認識しています。

それに伴って、問題意識の方も変わってまいりまして、経済成長と民主化の進展、それに伴う社会文化の変容、そしてインドの台頭に伴うグローバルな構造変動、これらを全体的に、より学際的・

総合的に解明する必要があると考えています。

もちろんインドの現状は、いいことばかりではなく、新たに暴力や差別や貧困の問題も可視化されています。しかし、これは単なる可視化ではなく、新たなダイナミズムのなかで新たな問題が起こっていると考えたべきではないか。まだ解決されていない問題が残っているというだけでなく、これらの問題が現在の動態のなかでいかに起こっているのかを理解する必要があるのではないかと考えています。

それから、いまの政治経済の活性化の中には、南アジアに特徴的な動きがある。地域研究としては、これも捉えておく必要があると考えます。以前のような国家主導型ではありませんし、市場原理のみで動いているわけでもありません。国家と市場の連携的な動きに加えて、南アジア地域の固有な社会や文化が補完的に働きながら、多元的でしかし階層性を持った諸社会集団が公共参加をしていくようになっているというのが現在の変化の本質だと思います。

こういう現実の前で、イシューや視角もどんどん変わってきています。

第一は、環境です。環境問題は以前の『南アジアの構造変動』プロジェクトでも設定されていましたが、環境か開発かという、環境保全と経済発展の矛盾が大きなテーマであったように思います。それに対して現在は、自然資源をいかに、また誰が利用することによって、持続的かつ包摂的な発展が可能になるのかという問いに変わってきていると思います。また、環境問題が世界的な問題になるなかで、環境と歴史、あるいは環境と政治経済の関係について非常に研究が進展している。こうした成果をどのようにこのプロジェクトにも取り入れていくかという課題が生じてきていると思います。

第二には、特定領域プロジェクトのときには、政治と経済を統合的に捉えようという視点が強調されましたが、現在はさらに文化、社会、思想と、今の政治経済的活況が、どのようにつながっているのかという問題が、より明確に意識されるようになっていきます。特に、南アジア固有の社会や文化的価値のあり方が現在の政治経済状況とどうつながるかという問題意識は重要です。これは私や長崎さんの問題意識と重なりますが、多様性とその統合ということはどう考えるのか、違いを認め合いながら、どうやって協力できるのかという問題を、インド世界というのはずっと考えてきて、それがいまポジティブに反映されている部分があると思います。しかし、同時にそのような社会的文化的特徴を持つ差別や階層性の問題が新たなかたちに再編されながら継続している部分もあります。それをどのように考えたらいいのか。こういう意味において、政治経済や環境の問題と、文化、社会、思想との論理的つながりを、より明示的に考察しないといけないと考えています。

第三にあげられるのは、グローバルな比較と連鎖という問題です。今までは、ネーションがどう発展するのか、あるいはネーションがどう民主化するのかという視角で捉えられてきましたが、そうではなく、グローバルな連鎖のなかで南アジアがその固有な発展経路をどのように進展させていくのかという問いが生じてきていると思います。計画から市場へというここ数十年の国家体制の問

題のみではなくて、数百年や数千年といったより長期的な南アジアの発展経路のなかで現代的動態を理解する必要もあるでしょう。同時に南アジア地域を地球的な視野、ほかの地域との比較と連鎖のなかで捉える必要性もはっきりと認識され、その方向の研究も進んでいると思います。

三尾 最後の方は非常に大きな話も出ましたが、その辺はこの座談会では最後の方で議論をすることになろうかと思います。

田辺さんは明示的には触れなかったのですが、空間構造という観点から南アジアを考えてみようという視点も、『南アジアの構造変動』プロジェクトには入っていなかった視点ですね。この視点も、田辺さんが指摘したグローバル化との連鎖のなかで政治経済の活況や社会の変容を考えるという問題意識とつながってきます。ここで、このテーマで研究を進めている広島大学拠点が明らかにしてきたものをお話いただければと思います。

岡橋 いまご指摘のあったように南アジア地域研究において、空間への関心というのは、これまでそれほど大きくなかったと思います。地域研究者の間でそういう視点が弱かったし、われわれ地理学者自身も、空間構造をはっきり問題にしてこなかったからでしょう。今回いろんな分野との共同研究によって、空間構造の問題に正面から取り組むようになったこと自体が大きな成果だと思います。



広島大学は地理学を中心にインド研究をしてきましたが、基本的には動態地誌研究が中心でした。ある地域に共通する特徴、特にドミナントな現象を中心に地域を理解していくというやり方です。1960年代の終わりぐらいから始め、対象地域は農村から工業団地、さらには大都市と変わってきていますが、基本的な手法はフィールドワークで、かなり小さい地域を対象に丁寧にするという方法です。この方法が間違っていたというわけではないですが、この手法では空間構造へのアプローチは必ずしも明示的に行われませんでした。例えば農村が、ほかの地域とどう関わっているかという視点が相対的に弱かった。

現代地域研究プロジェクトを始めるときに、まず考えたことはナショナルなスケールも含めて空間構造の全体像を見てみようということでした。私自身も、今まで様々な地域を研究してきました。それもあるって、現在はGISも使ってプロジェクトを進めています。しかし、一番大事なものはGISによって得られるデータをどのように見るかという仮説でして、それが結構まとまってきているのではないかと考えています。

もう一つのテーマは、昨今の経済発展のメカニズムと空間構造の関係という問題でした。これは、2011年の国内全体集会のテーマでもあり、それを都市と農村という切り口で検討しました。もちろん、これで決着がついたわけではなく、むしろ、いろいろ大変面白い課題があることが分かってきたところです。広島大拠点としては、経済発展において大都市がもつ意味の解明という課題が出てきま

した。もう一つは、大都市をさらに広くした広域の集積地域であるメガリージョンにはどういう意味があるのかという問題もあります。それから、産業集積というのはどういう実態を持っているのか。さらに都市と農村の関係という課題もありますね。このように、空間構造と密接に関わる問題が鮮明になっています。

こういった課題をどういうスタンスで捉えるかという点は、私もまだ非常に迷っています。例えばデヴィッド・ハーヴェイという地理学者の地理的不均等発展論から言うと、こういうのは、かなりネガティブに捉えられているわけです。取りあえずは、そういう視点が一つあるということを念頭において課題に取り組みたいと思います。

もう一つ重要な視点は、インドは、やっぱり州という単位を持っていることです。これまでは非常にローカルなスケールで研究してきましたが、ローカルとナショナルの間にある州の意味が鮮明になり、経済発展とか地域発展も、インドという国の単位ではなくて、州レベルで追求していくことに意味があることがはっきりしてきました。この観点からの一つの成果としては、ウッタラーカンド州について、経済を中心に、いろいろな側面を多面的に捉えて検討していくというシンポジウムを2011年にいたしました。こういう研究をいろいろな州で綿密に研究していくことが非常に重要ではないかと思っています。

三尾 経済発展のメカニズムと空間構造の関係は、昨年の国内全体集会でも論点になったところですね。特に都市と農村の関係や、産業集積をどう考えるかといった点が議論になりました。このことに関連して、都市と農村の関係をどう考えるかという点について、いま仮説的に考えられていることをもう少し突っ込んでお聞かせください。

岡橋 従来、経済と空間を絡めるときには、空間というのは単なる入れ物だったわけです。けれども、いまインドで起こっている経済発展では、空間そのものが経済発展の重要な装置であり、それ自体が産業を生み出しているというふうに、相互関係が非常に明確になっているんですね。大都市の発展を見れば、それは明快だと思います。

インドの経済発展で何が大きく変わったかという、大都市の郊外空間が形成されてきたということですね。郊外は、一つは産業集積の場です。外国資本を中心とする産業集積の場につくり上げられてきたこと。もう一つは、それによって比較的高い収入を上げられるようになった中間層の居住の場にもなってきた。それが、単なる居住の場と産業の場ではなくて、トータルな一つの装置としてプランニングされているというのが非常に重要だと思います。だから、無秩序にできているのではない。それはかなり計画的につくられてきて、経済発展の一つの基盤になっているということが分かってきた。

そういう意味で空間というのは、従来のような都市とか、あるエリアの経済とか社会という話ではなくて、非常にダイナミックな変動が起こる場であるというのがポイントなんです。

また都市と農村の関係は、従来のような二元論ではいなくなっているというのも、私は痛

切に感じております。やっぱり圧倒的に大都市の影響力は高くなっていると思います。基本的に、空間というのがシステム化されてきているんですね。従来は、都市と農村というのは、分断的で、まだそれぞれの局地性を持っていたのが、大都市を中心とした一つのシステムのなかに農村が急速に統合されつつある。そのなかで、例えば人口移動なんかを見たら明確に分かりますけれども、労働力の激しい移動が起こっていますね。そういうのも一つの重要なポイントかなと思っています。

三尾 空間構造の変動、つまり都市と農村の関係のあり方や、郊外空間のさまざまな意味での発展といったことは、この10年、15年というところで非常に目覚ましいかたちでの変化だという趣旨のお話でした。すると、まさに『南アジアの構造変動』で考えていた時期、あるいは、それ以前の時期と比べたときに、断絶的に変化が起こったと考えるのか、あるいは連続的に変わってきたと考えた方がいいのかという疑問が出てきます。

水島 大きな経済変動のどこに切れ目を置くかといえば、やはり1980年代だろうと思います。その80年代の意味を考えるとときには、急に変わった部分と、長期的に動いてきた部分の両方をしっかり区別しておいた方がいいだろうという気が、すごくしています。

例えば農業の場合は、主要作物生産量は1960年代半ばから、いわゆる緑の革命から一貫して上昇していて、べつに80年代に急にジャンプするわけではない。一方、80年代以降農業部門のGDPが大きなマイナス成長を示すこともない。基本的には、ほとんどプラス成長で行ってしまう。一方で食糧の輸入比率は、それまで非常に高かったのが、80年代以降はほとんど5%以下の非常に低い率になって安定してきます。むしろ、80年代以降は穀物の在庫が過多になり、90年代になると輸出までされるようになります。だから食糧事情は明らかに、80年代に大きく変化しているわけです。

その一方で、第1次産業部門というのは、GDP構成比で見ると、1980年代に第3次部門に抜かれてしまいます。サービス部門を中心とした第3次部門が増えたからです。実際、1980年から始まる第6次5カ年計画以降は、第3次部門の成長率が目標を上回って、従来ずっと5%以下だったのが6%以上になっていきます。これは、その後も変わらない。

第2次産業部門を見てみると、これは1980年代に特に増えたとは見えません。1970年代は非常に低いわけですが、独立後の1950年代は、第2次産業の成長率は6%を超えています。ですから長期的に見ると、80年代に、そこが特に増えたわけではない。ただ、第2次部門が従来の成長率に復帰したといっても、実は、1980年代以降、輸出依存率が従来50%ぐらいだったのが70%以上に大きく増えていくわけです。

一人当たりGDPも、1980年代から急速に上向きになっていきますし、GDP中の輸出シェアも、従来全部5%以下だったのが20%台の後半にいつてしまうということで、明らかに構造が変わってきている。貿易依存度も、1980年代半ばごろから急速に増えていく。インド経済が従来の内向きな



ところから、田辺さんがおっしゃるグローバル化というかたちで大きく構造が変わっていくわけです。ですから、いわゆるテイクオフという意味では、1980年代を考えていいだろうと思います。

ただ、私はその工業発展とか製造業の発展とか、いわゆる GDP だけでテイクオフの時期を計ることが、方法的にいいかどうかというのは、疑問に思っています。

というのは、例えば平均余命も、識字率や乳児死亡率も、独立後一貫してはるかによくなってきているわけです。80年代に急によくなったわけではない。そうすると、数字が示している80年代の動きはいったいどこから来るかという問題は、今度は80年代に特に何が起きたのかということを見ないといけないことになりますね。

『南アジアの構造変動』のときは、経済変動の画期が80年代か90年代かという議論があり、90年代説の場合は経済開放路線を主因とするという考え方だったのですが、いま言ったように画期が80年代となると、少し別の見方をしないといけないだろうと思います。

柳澤さんは、80年代に画期がくる要因の捉え方には二つあるとまとめておられます。一つは農村社会主因論で、これは農村の緑の革命以来の変化が80年代になって表面化してきたと見るわけですね。二つめは都市、あるいは外的要因主導論ということです。

柳澤さんは農村社会主因論ですが、私はむしろ外的要因を見たいんですね。確かに1965年から緑の革命が始まって主穀類の農業生産はぐっと上がっていくわけだけれども、あのときの農業生産は高生産だけど高コストなんです。第1次産業のGDPが落ちていくと生産高だけ増えても農業に希望を持てないということを、多くの農民はかなり深刻に思ったのではないかなと思うんです。

一方80年代は海外への移民の急増がみられ、特に湾岸諸国への移民が、従来数万人にいなかったのが毎年20万人台になりますし、そこからのインドへの送金も70年代に5億ドル台だったのが20億ドル台に一直線に上がっていく。80年代も25億ドルぐらいでずっと一貫しています。さらに90年代には100億ドル、現在は500億ドルぐらいまで達しており現在では海外送金はGDPの4.1%あって、非常に高い率だと思います。

この海外送金は、実はかなりシンボリックなものであって、送られてきたのは金だけではないだろうと思います。例えば、抽象的な言い方になりますが、希望というものも送られてきたのではないかなと思うんですね。

というのは、80年代初めまでの農村というのは、教育を受けても就職できない大学生とか大学院生が結構いたんです。それが、やっぱり変わっていきました。それまでは、高学歴層の閉塞感があったのですが、彼らが具体的に知っている人間が留学していわゆるIT産業などに就職もして非常に羽振りよくしていることも伝わってくるようになったわけです。

それから、80年代というのは東南アジアが急速に発展していて、私の調査地である南インドの村の人はそれを身近に知っていました。私が当時インドに行こうとすると「シンガポールでポリエステルのサリーを買ってきてくれ」とよく言われました。ポリエステルのサリーなんてインドでは暑

くて着ていられないはずですが、きれいなわけですね。彼らは、シンガポールならばインドで入手できないものが簡単に手に入るという情報を持っていた。電気製品などいわゆるブラックマーケットを通じた取引が非常に盛んになってきたわけで、そういう消費への憧れが80年代は非常に大きく伸びていっていただろうと思います。

そういう意味で、80年代というのは、インドにとって単に経済的な動きではなく、外の情報が非常に大きく入ってきて、人々が変わらないといけないということを日常的に感じるようになった時代ではないかと思うのです。そういうものも含めてのテイクオフを考えた方がいいのではないかと思います。

柳澤 いまの水島さんの話に、ある意味で補完をするかもしれないし、対立するところもあるかもしれませんが、コメントしたいと思います。

たまたま先日入手した2冊の本があります。一つは、バグワティとバナガリアが編集した *India's Reforms* という本で、もう一つは、アトゥル・コホーリーが書いた *Poverty amid Plenty in the New India* という本です。この2冊は、とても対照的なんですね。

バグワティらは、インドの経済成長が市場化、ことに対外的な開放で起こったという議論をしています。その結果、貧困は減ったということで、それを象徴する写真を本の表紙に使っています。写真では、村の貧しい女性が、頭上の金属製の壺で水を運びながら右手で携帯電話を持っています。つまり、こういう層まで携帯電話が入っているということを言いたいんでしょうね。そういう点では、貧困層のなかにも経済的な上昇があるんだと。

一方アトゥル・コホーリーの本の表紙では、よく知られているムンバイのスラムがあって、後ろに中間層の高層住宅が建ち並ぶ写真が使われています。まさに“poverty amid plenty”、インドの豊かさのなかに、実は貧困がある。貧困層が上昇できないという側面を強調している。つまり、バグワティらの言うように市場中心で対外的な開放重視の経済によっては解決されないという主張をしていると思います。

これはとても象徴的な議論だと思うんですが、水島さんの話との関係で言うと、前回のプロジェクトの時点では大勢はインドの経済成長を「計画から市場に」という脈絡で理解しようとしていました。ある意味でバグワティなどの立場を理論的に想定して考えていたわけです。しかし2000年以降、そういう認識に対し、水島さんが言ったように1980年から変化が起きているという認識が出てきた。主要な経済改革は1991年を起点にするわけですが、経済成長はそれ以前から起きている。この1980年からの10年間をどう理解するかということをめぐって、市場派的な理解に対してさまざまな批判が出たわけです。

その批判の一つは、アトゥル・コホーリーによるものです。彼は、政策の変化を「対外閉鎖的な輸入代替工業化から対外的な開放政策へ」ではなく、「社会主義的なものからプロビジネスになった」



と見るべきだと主張しました。つまり対外的な開放は国内のビジネス層を積極的に強化するという必要の限りににおいて利用したのであると。むしろ 1980 年代に韓国型あるいは東アジア型の開発政策をインドが採ったことが工業発展の加速化の非常に大きな理由なんだと主張したわけです。この議論に対する支持も結構あると思います。

もう一つの批判は、そういう政策の変化に限定しないで、経済成長加速化の背景を見るべきだという立場です。幾つかの計量的分析を見ると、GDP 成長率のブレイクは 1980 年、あるいは 1979 年にある。そうすると、それ以前にある変化というのは農業生産の上昇だとパラクリシュナンなどが主張したわけですね。農業部門が GDP に及ぼす影響というのは、工業や輸出に比べても大きかった。ガネーシュ・クマールなどは、ことに 1980 年代においては、GDP の高度成長化をもたらした契機は農業であると言っています。

日本でいうと藤田幸一さんがこのプロジェクトの国際会議などでそういった主張をされています。つまり農業が基盤となって工業や GDP の成長の加速化が起こった。農業生産の上昇によって、農村がそれなりに購買力を持って、いろんな工業製品を買いだした。あるいはサービスを買いだした。これが一番大きな基礎だという議論でしょう。

この議論に賛成しながら、私は三つのことを言っておきたいと思います。一つは、70 年代からは緑の革命で農業生産の上昇があり、農業労働者などの賃金も上がり始め、バグワティの本の表紙にあるように、下層階層も多少はものが買えるようになったということです。

もう一つは、同時に、農村消費の増大はお金や単なる購買力の上昇と関連するだけではなく、農村社会で持続的に起こってきた社会的な構造変化にも関連するということです。例えば文化人類学者のオセラがケーララの農村で消費行動を調査したら、カースト的に下層の人たちの消費は、上層に対するいろいろな形での抵抗や、自立の主張につながっていた。新しい、映画の俳優が着ているようなもの、しかし本物は高いから、それにせものを買う。ファッショナブルな、しかし安物の、ローカルにつくったものを買う、身に着ける。あるいは、合繊の服やだぶだぶの服を着るとか、安価なゴムの運動靴を履く。女性も最新のスタイルのサリーやブラウスを着て、イミテーションの宝石を身に着ける。そういうふうに農村社会の変動のなかで意味を与えられて、いわゆる西洋的な、あるいはグローバルな商品も消費されていくということを彼は主張しています。1920、30 年代の農村社会における階層的な変動のなかで、ある意味で自立化の象徴としての消費ということが起こっているということを、私も言ったことがあります。そういう脈絡で、農村の下層は意外にもグローバルと見られるものを購入していくわけですね。

つまり、消費市場の拡大というのは、お金に余裕があるかどうかという問題とともに、農村社会の社会的な変動の脈絡の中で増幅されて、農村社会が消費市場となるという形で起こってくるのではないかと思います。

先ほど話した写真がとても象徴的なのは、農村の消費生活は実は一方で非常に貧しい生活だとい

うことも合わせて示している点です。貧しい生活のなかで象徴的な意味で携帯電話が持たれるのであって、必ずしも貧しい人たちの経済状況全般や生活の質が全体として上昇するなかで消費するのではないわけです。そういう脈絡が、水島さんが指摘した外からのインパクトの受容の論理の下地にあると思います。インパクトが入っていく論理の背景に農村社会における経済的・社会的な変動があるだろう。この点も強調しておかねばなりません。

最後の一つは、今度は経済政策との関係で言いますと、90年代とそれ以前とがまるで違うものになったのではないということです。もちろん1991年の開放以降、明らかにITやコミュニケーション産業や製薬業などが伸びています。しかし、それらのうち少なくとも幾つか、ことに製薬業などは典型ですけれども、1970年代から多国籍企業を猛烈に排除して内向きの保護政策をしたんですね。独立以降のインドの産業発展は非常に内向きで対外閉鎖的だったわけですが、1970年代になると部分的に、1980年代になるとさらに開放していく動きも出てきます。しかし、それは全面的な開放ではなく、例えば製薬業については、70年代に多国籍企業の活動を厳しく制限し始める一方で特許法を緩めてインド企業による既存の薬の生産を可能にするようなことを行っています。そういう政策によって育った製薬産業が改革とグローバル化以降に国際的に花開くということがあるので、計画から市場化へという流れをまるで違う方向に行ったのではなくて、あるところで連続し、それ以前の体制がその後を支えているというふうに考えるべきだろうと思います。

都市と農村との関係についても、どちらかが経済発展を主導したということではなく、両方ともあったと思います。グローバル化のインパクトによっても農村が変わるけれども、一方で農村における経済的・社会的変化があるから、グローバル化が農村にも及ぶという、両方が相乗的に進んだというふうに見るべきではないかと思っています。

三尾 1990年代からの大きな変容という点では、インドの文化や宗教の動態がもはやインドという地理的空間の枠の中だけを見ていては捉えきれなくなったということも見逃せない変化だだと思います。ネーションの枠を越えて、グローバルな人やモノや情報の流動とのつながりの中で、インドの文化や宗教の変化を考えたいと思っています。しかもインドが一方的に外からの影響の受け手となって文化や宗教が変わっていったのではなくて、インド発の人やモノ、情報が外の状況にも大きなインパクトを与えている。またそのインパクトがインドに返ってきてインドの状況をさらに変えてゆく、そういう動態です。

民族学博物館拠点としては、仮説的にこの動きが1990年代から活発になっただろうという見通しの中で研究会を重ねてきましたが、最近もっと長期的な変動の中でこの動態を見るべきだという見方に変わってきています。それを考えるときに、80年代の外の世界とのつながり方の変化や人々のマインドの変化という水島さんの指摘は大変参考になると思いました。また、農村社会の構造変動との関連の中で、グローバルな商品の消費を考えるべきだという柳澤さんの指摘もとても重要だと思います。文化表象や宗教実践のあり方の変化だけではなく、消費の持つ意味といったことにも

視野を広げる必要がありますね。

田辺 私は民衆の主体化という点で80年代からの連続性を見るべきだという柳澤さんの指摘に賛成します。ただし、連続性と同時に断絶の面も見べきではないでしょうか。80年代の経済成長というのは、無理をした大きな公共投資があり、それが続かなくて財政が破綻して1991年の自由化になったということを考えると、やはり大きな仕組みのうえでの断絶はあると思います。

ただ、1990年代の初めころにはグローバル化と下からの主体化が矛盾するのではないかと思われていた。しかし、柳澤さんが指摘されたように、グローバル化と下からの主体化が、もちろん軋轢はあるけれど、実は連動して補完的に働いているということが、1990年代末以降指摘されるようになった。そういう理解でいいでしょうか。

柳澤 その問題は結局80年代の6%台への経済成長への加速がどういう経路で起こってきたかという、その論理の構成の仕方だと思います。いまおっしゃったのは、つまり国家の公共投資によって支えられたんだという見方ですね。そういう側面があることは、僕は全然否定しません。しかし私は、先ほど言ったように農業がGDPを押し上げていったんだという面を強調したいわけです。

広島での国内集会のときにも指摘したことですが、1980年代から90年代の場合、元気なのはインフォーマル産業なんですね。フォーマル部門における雇用者数の増大はほとんどなく、だから「雇用なき経済成長」と言われているわけです。80年代、90年代は、フォーマル産業部門は雇用数を見る限り非常に停滞的です。それに対してインフォーマル部門は、工業もサービス産業もものすごく元気に増大しています。工業の面では小規模工業やインフォーマル産業、例えば、パワー룸産業であるとか、メリヤス業であるとか、靴や安い履物などですが、それらは農村需要で支えられていました。農村の、私は「疑似ブランド」需要と言っていますが、それがインフォーマル部門の成長を支えた。インフォーマル部門が農業を通じて発展し、それが1980年代、さらに90年代の経済発展全体の、サービス産業、工業の発展の本流を成したのではないかと、私は思っています。

公共投資も重要だったと思いますが、それは決定的ではない。というのは公共投資はその後90年代に落ちていきますけど、発展の構造は90年代になっても変わらないからです。

岡橋 1990年前後の連続性は明らかにあると思いますが、私は、いまの時点から振り返ったときに、やっぱり経済成長の牽引力として大きかったのはIT産業だと思います。

従来の工業化の場合は、機械工業などのように部品産業がベースにないとできない産業発展なんですね。だから途上国はどれも苦勞して、なかなかうまくいかなかった。インドの場合もその点でなかなか改革が進まず、ベースが非常に弱かったと思います。だから、80年代に部分自由化をしたけれども、僕が見ている範囲ではその辺が全然うまくいっていないわけです。結局、外資に頼らざるを得ない。そのなかで外資に頼らずに内発的に動いていたIT産業というのは、途上国の経済発展の新たなモデルを提起したんですね。要するに、既存の産業基盤がなくても人材があればできるという、これはとんでもないモデルで、しかもインドが世界のトップになったわけです。

消費のマインドのことを水島さんが指摘されましたけど、IT産業の発展によって産業界のマインドも大きく変わったのではないかと思います。これが2000年代のブーストにつながっているんで、産業という点では、90年代の後半ぐらいから大きく断絶したかたちで展開していると見た方がいいのかなと考えます。

三尾 現時点からインドの経済発展を考えたとき、80年代の理解の仕方が非常に重要だということはいくぶん分かります。一方で、岡橋さんのお話にあったように、例えばIT産業が外資に頼らず、内発的なかたちで経済発展を引っ張り、それが2000年代以降の更なる発展につながったという現象も起こっているわけです。

それも頭に入れたときに、柳澤さんがおっしゃったような経済的な発展の要因、あるいは構造が80年代ぐらいに出来上がったとして、それはいまも基本的に変わらずにきていると考えるのか、それとも、2000年代以降、何か新たな要因が加わっていると考えるべきなのかといったところをもう少し伺っておきたいと思います。

水島 岡橋さんが先ほど指摘された農村と都市との関係の変化、それからライフスタイルその他にしても、キーワードは溶融化ではないかと思います。

まず空間自体が非常に溶融しています。都市と農村との垣根がかなり溶け合っている。従来は都市に行くことが非常に大変だったのが、単純な話で言うと、橋が1本しかなかったところに4本架かってくるだけで、都市との距離感覚が全然違ってきますね。

単にフィジカルな面だけではなく、価値規範の点でもタブーがなくなってきた。象徴的な例は、床屋さんです。従来は不浄な職業と見られてきましたが、今はいわゆる床屋カースト以外の人が入ってきています。日本の美容院のような椅子を置いて村の中に店を開いている。従来、生き方を制約してきた価値規範自体が溶融しているわけです。

また女性の労働雇用率は、例えば中国に比べればインドではまだ低い。しかし、明らかに女性の労働力は目に見えて増えつつあると思います。また雇用慣行も、例えば農村のなかで雇われるというのは、1960年代ぐらいまでは、かなり長期の雇用慣行があり、その背後に農村のなかでの支配・被支配構造があったわけです。これが、70年代、80年代にかなり契約的なものになってくる。契約上は、相互平等な立場になるわけですね。

いろんな意味での溶融が起きている。その溶融のなかにチャンスを見いだす人たちが増えてきていると思います。全ての人が平等にそのチャンスにアクセスできているかどうかは、きちっと見ないといけないですけども。

長崎 80年代の後半から90年代にかけての経済や社会の変動の見方についてなぜ論争が起こったかという話について補足したいと思います。

私たちが、『南アジアの構造変動』という新しい研究プロジェクトをつくろうと思った一つのきっかけは、何と言っても1991年のソビエト社会主義



共和国連邦の崩壊と、経済自由化の始まりです。社会主義が崩壊して、どういう社会になるのか、当時の私たちは分からなかった。それまで資本主義の行き詰まりを切り開く道は社会主義にあると思われていましたから、多くの方はインドは社会主義社会に向かっていると思っていました。1945年辺りからは、ネルーもそうですけれども、少なくとも社会主義型社会が目指されてきた。ネルーイズムが経済や社会のモデルとしては支配的であり、それが何とかいくかなと思ってきたところがあった。それが事実上崩壊してしまったわけです。農村は、柳澤さんが指摘したように別のかたちで発展していきましたが、工業や他の産業は依然として変化しない。そういう時代をどう考えるのかというのを誰も言わない。そこを私たちは問題にしたかったのです。

非常に新しい思想の転換がインドで起こっていることを何とかして日本からも捉えたいと思っていました。今後の世界は社会主義に可能性は見いだせないし、インドも社会主義型社会には向かっていない。では資本主義のなかで農業や工業などさまざまな分野がどういうプロセスで発展していくかという問題設定に変わったのが『南アジアの構造変動』だったわけです。だから、プログラムの副題は最初はまさに「計画か市場か」という二者択一的な問いかけでした。でも途中からは「計画から市場へ」に変わってしまったのです。そして最後は「経済自由化のゆくえ」となった。そういう時代の転換をあのプログラムは捉えようとしていたと思います。

三尾 社会主義体制が崩壊したなかで目指すべき社会像が見えなくなったとして、それに代わる社会像がそこからの20年のなかで見えてきたのでしょうか。また、インドはそれ以後、世界に対して新しい社会モデルを示してきているのかということも大きな問題になってくると思います。グローバル化、経済の変動、あるいは水島さんが指摘されたような溶融化が進むという時代状況の中で例えば社会運動であるとか女性運動といったテーマはどのように考えられるでしょうか。

長崎 インドが非常に面白いのはやはり社会運動の力を信じて実行していることだと思います。民族独立運動が1885年ぐらいから始まり、何十年にわたって運動によってある程度社会を変えて、しかも国家の独立を勝ち取ったという成功例を持っているわけです。国家は分離独立という結末になってしまいましたけれども。

1950年代までは、日本でも世界のどこでも非常に多くの社会運動がありましたが、今は退潮傾向にある。その中でインドは依然として社会運動が続いている。例えば元不可触民の運動は盛んに続いているわけです。社会運動が社会を変えていくことを、いまでも強く信じている数少ない国の一つであるというのがインドの特徴の一つだと、私は思っています。

栗屋 非常事態宣言後の、一挙に社会運動が盛り上がるという時代の起点を1977年として、当時と現在を比べてみると発信源が爆発的に増えているという違いにまず気がつきます。個人にせよ、グループの数にせよ、それが重層的、多重的、爆発的に増えています。



先ほどまで経済の面からの大きな潮流が議論されましたが、経済の変化が生み出しているさまざまな問題点には、あまり言及されなかったように思います。貧富の拡大、あるいは豊かななかにも貧困が残っているということも、少し指摘がありましたが、もっとさまざまな亀裂や矛盾が同時進行的に増えています。それに対応して、社会運動の発信源、あるいは運動の 이슈も、ますます多様化しているのだと思います。

社会運動の数だけではなく、質ももちろん大きく変わっているわけで、その質の変化をもたらしている幾つかの要因は、歴史的な変化のなかに探れるでしょう。例えば、読み書きのできる人口が、ダリト層や下位カーストのなかで圧倒的に増えています。またインターネットやソーシャルメディアといわれるようなメディア環境の大変動があるということが、すぐに思い浮かびます。

社会運動、特にジェンダー、女性運動に絞って振り返ってみると、1980年代はコミュニナリズムの問題との関わりが大きな問題になりました。1980年代は、女性運動にとっても大きな試練といえますか、新しい挑戦という時代だった。第2波の女性運動が一挙に噴出した70年代後半から10年足らずで直面した挑戦としては、例えばサティの問題があげられます。また離婚されたムスリム女性に対する扶養費の問題をめぐり、それまでマジョリティーの女性運動が掲げていた統一民法典制定という目標、宗教の違いにかかわらずジェンダー平等の民法典を目指すという目標が、がたがたと崩れたのが1986年ぐらいです。

こういう女性運動における変容は、これまで特にヒンドゥー・ナショナリズムをめぐる問題として語られてきたわけですが、いま思うに、経済変動、あるいはグローバルな政治状況のなかで再度見直されるべきものだろうと思います。

カースト問題の捉えられ方も大きく変わっています。1990年に起きたアンチリザベーションの問題をきっかけに、カースト問題の捉え方が大きく変化してきたし、それに基づく社会運動も、かたちを変えてきています。つまり、それまでカースト問題はダリトとかOBCの問題であるとされてきた。逆に言うと、上位カースト、特に都市部のミドルクラスというのは、カースト問題からは遠い存在であるという意識があった。それが、カースト問題が上位カーストにも突きつけられるという状況が生まれてきたように思います。

一方、社会運動のグローバル化も90年代に進行しました。組織面においても、またこれは新しいメディアが大きく関係していますが、言説的にもグローバル化が進んでいる。言説的な変化としては、例えば人権や権利というタームが用いられるようになっている。2001年のダーバン会議以降ダリトの問題を人権レジーム、人権言説を使ってグローバルな舞台で発言していくということが明確になってきていると思います。

また、女性運動にしろ、ダリトの運動にしろ、国家との関係にも重要な特徴があると思います。インドの場合、運動側からの主張がなされると国家がそれなりに対応する。これは単なるガバナンスの問題で、人口として集約化された人間を統治していくという側面も強くありますが、さまざま

なダリト関係や女性問題関係の部局が設けられ運動側の主張がそれなりに政策に反映されるといったことが、これも 80 年代以降にはっきり見えてきているように思います。

最後に今後の研究の方向性について述べておきたいと思います。それは経済的な大きな動向、これには柳澤さんや水島さんが強調された消費や生活スタイルの変化も含まれますが、これを政治運動や社会運動との関係でどう捉えていくかということです。消費活動が盛んになる、欲望や希望というものが膨張していくという現状と社会矛盾との関係は、密接に結びついているし、その矛盾も平等に配分されるのではなくて、構造的な不均等があって、ある集団に偏ってあらわれる。だからこそ、またそこに社会運動が生まれるわけです。

一方で、社会運動やジェンダーの研究では、1980 年代以降文化主義的転回が一挙に進んできたように思います。それによって、経済の動向の研究との乖離がますます広がっています。文化論的な転回は初めから新自由主義的な経済動向とマッチして進んでいるということも自覚しながら、ギャップを埋めていくことが求められるだろうと思います。

三尾 90 年代以降のインドを取り巻く経済変動やグローバル化といった状況のなかでインドの社会がどういう方向へ向かっていくのかということに関して、例えば社会運動は、ある方向性を打ち出すような方向に進んでいるのか、それとももっと拡散した方向になっているのかという点は、どう考えたらいいのでしょうか。

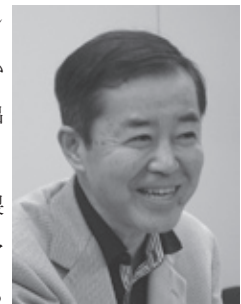
栗屋さんからはグローバル化とのつながりのなかで、例えば人権というタームが出てきたというお話があったのですが、それ以上にインドの側から主張するといった方向性は何か出てきているのでしょうか。

長崎 新しい方向性が出てきているというよりは、むしろ持続的に、インドの人々は社会運動が切り開く新しい問題提起やその解決を信じているところがあると思います。

日本の場合は、運動で何かやっていくことに真面目に取り組む人は、社会の非常に数少ない部分になってしまっています。せいぜい選挙で政権政党が変わるぐらいのところですね。それに対してインドは、民族運動の力が社会を変え国家を獲得したということから始まって、現代にいたるまで依然としてどこかに運動への信頼という流れが残っている数少ない国だと私は思います。

栗屋 私は、いまの段階は社会運動にもさまざまなスタンスがあり、政府に取り込まれてしまうようなものもあれば、悪い意味で NGO 化しているものもある。それこそインドゥー・ナショナリズムにしろ一つの社会運動ともいえるでしょう。そういう意味で、単一の価値観とか社会像がインドの社会運動の総体として打ち出されるというような状況ではないと思います。

杉原 さきほど栗屋さんが政治経済の研究と社会運動や文化の研究とが分裂してしまっているという話をされました。私は生存基盤の確保というテーマに取り組む中で、必ずしもインドについてではないけれども、その問題をずっ



と考えてきました。

識字率がずっと上がっていくと、あるところで社会変化にもたらす意味が変わってきます。安全な水の確保という面でも急速な改善が進んでいます。特に、非常に遅れた州で目立ってきている。また幼児死亡率が下がっている。もっと下がらなければいけないけれど、急速に下がってはいる。これらは、いずれも 1991 年を境に大きく方向が変わるのではなく、ほとんど連続的に、あるいは加速的に改善される傾向にあります。つまり成長がもたらしたものは、消費や経済成長などといった量的な便益だけではなく、一番基本的な人権だとか生存基盤の確保というところが非常に目に見えて改善されているわけです。

にもかかわらず、それが社会運動とか政治運動の研究にどういうふうに組み込まれてきているのか、はつきりしません。例えば、識字率が上がったら、それが何かの契機になって政治運動とか社会運動の質が変わるのかといった研究はほとんどありませんね。

あの識字率でインドの選挙は本当の民主主義だと言えるのか僕は怪しいと思っていたのが、そうではなくなったのなら凄いなどと思うわけです。幼児死亡率が下がったと簡単に言うけど、それはものすごく大きなことなので、それを焦点に据えた運動が各州であったのかどうか。こういうことがグローバル化が要因で達成されたとはとても思えないんです。

それについて何も言わず、成長の原因が国内だったか、外国だったかといった議論をしているのは非常にまずいと思います。社会運動、政治運動、価値観の変化といったことを、もっと生活に密着したところで捉えていただけないかと思います。

ジェンダーについても、言説というよりも、具体的に幼児死亡率がどう下がったのか。この前の国際会議でもチェンナイの水の話がありましたけど、ああいう研究をもっとしていただくと本当のことが分かるのではないかと思います。

三尾 基盤的な部分での変化が、政治の変動や民主主義のあり方そのものの変化ということとどうつながるかという問題提起だったと思いますが、堀本さんいかがでしょうか。

堀本 まず『南アジアの構造変動』においては、その時点までで民主主義が定着した、そのうえで自由化後の 10 年間でどう評価するかという問題意識があったと思います。ところが 2000 年以降は、変容のスピードが加速度的に進んで、政治の現状がますます捉えにくくなりました。政治発展の多様化の一方で、さまざまな細分化など、いろんなことが同時に起きています。それをトータルに見たときに、どのようにインドの政治が発展しているのだろうか。大げさに言えば、発展モデルということになるかもしれませんが、それを捉えてみたいと個人的には思っています。



ラーマチャンドラ・グハは『インド現代史』（佐藤宏訳）のなかで、インドはフィフティ・フィフティの民主主義だと言っています。民主主義のハードウェアはだいたいいい。表現の自由、投票の自由、

選挙の自由といったものは確保されている。しかも民主主義国のなかでも、インドほど最下層の人の投票率が高い国はないと彼は指摘しています。選挙や民主主義の土着化ということには既に成功している。問題は、そこから先でしょう。

インドの政治で現在一番大きな問題なのは、インドの政党はある意味で運動の発展型だったのに、それが私党化している、家族政党になっているという現象だと思います。要するにハードの方は成立しているけれども、ソフトウェアの部分が非常に弱い。それから政治家の汚職はすさまじいものです。過去 50 年ぐらいで民主的な制度は確立した。しかし、中身をどうするかというときに、いろんな問題が出てくる。政党自身も問題を抱えている。

さらに、いわゆる LPG、つまり自由化、プライバタイゼーション、グローバリズムの三つが、インドの政治に与える大きなインパクトという問題があります。インドの 90 年代以降を見ると、それまでインドのオピニオンリーダーだった人たちが全部と言っていいほど、単純に言えば反 LPG に転換してしまった。左翼も、反米主義者も、環境論者も全部、反 LPG の側、あるいは LPG をどう考えるかという方向に移ってきている。マイノリティー論者もジェンダー論者も全部そうです。そういうところでインド全体がわき上がっている。

LPG に反対する人たちの根拠になっているのは格差の問題だと思います。それは個人間であり、地域間であり、コミュニティ間であり、州間であり、地域間であり、いろんな格差です。90 年代以降、それまでのインドの政治理念の基本にあった平等性に代わって自由という理念が前面に出てきた。しかし、これでは格差とか不満などにはとても対応できない。そこでいまインドの政治思想上の大きな課題になってきているのが公正さだと思います。要するに、格差の問題にどう対応していくか。それはまた、アイデンティティーからガバナンスへの移行といった議論に、当然結びついています。

そのうえ、パキスタンにおけるイスラム化の進展が、ある意味ではインドのヒンドゥー・ナショナリズムをさらに燃え上がらせているという状況がある。それがますますインド政治を分かりにくくしています。

もう一つ申し上げておきたいことは、特に 2000 年以降のインドの政治では、外交が非常に強いリンクを持っているということです。なぜかという、自由化がどんどん進もうとしているからです。最近でいえば、典型的な例が、従来単一ブランドしか認めなかったのを今度は総合ブランドで認めようという動きが、野党の反対に遭って進展しない。そういった問題が、内政が外交にも反映される。総合卸を反対するのは、明らかに州政権です。そういう内政と外交の緊密なリンクが起きているわけです。

また 2000 年以降、各国政府の外交政策の基本は、エンゲージメント・アンド・ヘッジングです。つまり関与することと警戒態勢を敷くということです。エンゲージメントの方は、基本的に LPG と深く関わっています。つまり自由化であり、民有化であり、グローバル化も、それに関わってきて

います。この辺でも、内政と外交は強い関わり合いを持っていくことになるだろうと思います。

90年代以降のインドは、戦略的パートナーシップという関係をばんばん結んでいます。これはたぶん世界でインドが一番多い。23カ国です。片や中国が12カ国。日本は、たぶん5、6カ国でしょう。つまりインド外交は、非同盟や印ソ同盟と違っていろんな重要な国と関係を保つ方向に転換しているわけです。これは、小さい国がやるんだったら、べつにおかしくない。しかしインドほどの規模の国が、そういう外交政策を打ち出しているというのは、かなり画期的な意味合いを持つかもしれないことです。

そういう辺りも含めながら、インドの内政と外交を絡めたところでトータルにインドの政治発展を見るとインド型政治発展、あるいはインド政治モデルといったものが出てくるかもしれないと考えています。

杉原 「公正」というのは、フェアネスですか。

堀本 フェアネスですね。

杉原 フェアネスは、だいたいコラプションに対する概念として出てくると思います。

堀本 コラプション、それから格差の解消、両方を含むのではないのでしょうか。

杉原 その二つはずいぶん違うと思うんですね。腐敗に対する公正と、単なる経済格差に対する修正では質が全然違う。フェアネスを言っている人は、本当にコラプションを何とかしようとしていますかね。

堀本 アンナ・ハザレが進めているコラプションについて強い規制を作れという運動は、それを象徴しているだろうと思うんです。

杉原 ええ、そうですね。しかし、それは歴史的に、例えば19世紀から腐敗をターゲットにした運動があるかといった問題は非常に面白い論点だと思います。

長崎 民族独立運動期には、腐敗をターゲットにしている運動はほとんどないですね。

三尾 そうすると、いまアンナ・ハザレの例が出ましたけれど、それは非常に新しい現象であるということになるのでしょうか。

長崎 腐敗は、少なくとも独立運動期には中心的には取り上げられない問題ですね。

杉原 もし本当だったら、それは現代の核心に迫る論点で、この運動は新しい運動として考えた方がいいのか、経路依存性があるのかという点など、もっとこのプロジェクトでも追求すべきだと思います。

長崎 アンナ・ハザレは別として、元不可触民の人たちの運動といえども、残念ながらその人々の社会のなかには相当の腐敗がありますね。しかし、アンチ腐敗のなかにもう腐敗は含まれているけれど、それがあつ種の浄化的な要素を持つということも考えていくべきだと思います。

堀本 インドにも腐敗はある。それに対していろんな不満が出る、ナクサライトが出る、イスラム原理主義が出てくる。ただ、インドと中国を比べると、中国の場合は、年間10万件以上の抗議活動

が起きている。どうしてかといったら、自分たちの意見を発散させる場がない。要するに、不満を吸収する装置がないのが、インドとの大きな違いではないか。そういった不満を吸収できるのがインドの民主主義のポジティブな特徴なんだと思います。

田辺 70年代の民衆運動は、強権的な国家統治に反対しつつ、人々を真の担い手とする政治を求める運動だったと思うんですね。いまは、よりよいガバナンスを求める運動に変わってきた。例えばそれが腐敗をターゲットにするといったかたちで象徴的に表れてくるのではないのでしょうか。

さきほど堀本さんが示唆されたインド的な政治の特徴ということなのですが、やはり運動、しかも栗屋さんがおっしゃった通り、その運動が非常に多様化しているというのが非常に重要だと思います。つまり多様な声が公共圏で聞かれるようになった。これはもちろん、一方ではさまざまな問題があることの反映ですが、反面では問題があるということ、それぞれの立場から言えるようになったということだと思います。

しかも、下から民衆が活発に声を上げている一方で、立憲主義体制も少なくとも形式的にはきちっと残って民主政治が続いています。つまり、代表政治という枠組みはしっかりしながら、それを補完するようなさまざまな社会運動や政治運動が非常に活発である。しかも、それらの運動のなかで多様な立場の多様な声が聞かれている。これは、それぞれの生存基盤の質向上を求める声という見方もできるでしょう。自然資源や教育・就業の機会に誰がアクセスできるかという問題をめぐる政治的な運動が活発になっていて、それが単に取り合いではなく、効率的かつ公正なよりよいガバナンスをちゃんとやれという政府への要求にもなっているところが非常に面白いと思います。

民衆の参加と代議政治のバランスを取りながら政治が動いているというのは、堀本さんがインドの特長としてよく指摘されている、民主化と成長が両方起こっているということともつながっていると思います。つまり、柳澤さんが強調されたように、民衆が主体となって経済を引っ張っている側面と、民衆が主体となって政治に参加していく動きが、70年代、80年代から継続していて、それがいま、一方では市場経済、そして他方ではトランスナショナルな市民社会、例えば人権運動などとつながっている。それは単なる一元的なグローバル市場やグローバル市民社会ではなくて、国境を越えた交換や交流を踏まえながら、インド社会に固有の多元的な主体化が進展し、さまざまな人が自分の立場からものを言える状況が生まれている。これが、インドモデルとまでは言えないかも知れないけれど、これまでの西洋や東アジアにはないような、新たな政治経済のモデルへと成熟していく可能性があるのではないかと、そうなったらいいなということを期待しながら、インドを見ています。

三尾 最後に今回のプロジェクトの新しい視点について、手短ですが取り上げたいと思います。一つは、生存基盤という考え方を現代インドの成長との関係で考えようという点です。もう一つ新しい点だと思うのは、いわゆるインドの伝統思想を現代インドを考えると、どのように組み込むのかという視点だと思います。生存基盤と成長に関して杉原さんからお話をいただき、それから、

伝統思想との関わりについて長崎さんの方からお話したいかと思います。

杉原 まずインドの成長というテーマについて一言言っておきたいと思います。我々のプロジェクトは今後、どの分野であっても1990年代以降の成長メカニズムをまず意識して、成長がどういうふうにして起こっているのかということを考えなければいけないでしょう。

なぜインドは、日本やNIEsやASEANや中国よりも遅れたのかという、いまや伝統的な問題がありますね。しかし同時に、アジア・アフリカにはまだテイクオフできていない国が数多くあります。インドはそれよりも早く、少なくとも90年代にテイクオフに成功している。問題はそれがいつ始まったかではなくて、なぜ成長が今までの20年間持続しているのかという点にある。インドが、まだテイクオフしていない諸国を引き離しているのはなぜかということを比較して考える必要があると思います。

われわれの間ではこの問題意識が非常に弱いと思います。いまや中国研究や東南アジア研究では、それは当たり前のことです。中国や東南アジアから他のアジア諸国やアフリカへ開発の経験をどう輸出するかという問題意識が当然のようにある。なぜインドをテーマにその問題意識が出てこないのか。この意識は現在インドでは既に出てきているかもしれないですけど、われわれもそういう意識を持って分析すべきだと思います。

生存基盤論については、二点だけ言っておきたいことがあります。一つは、その発想の骨子についてです。そもそも生存基盤論は、日本や中国の競争力を考える分析枠組みだけではインドの競争力を考えるのは無理で、違う分析枠組みを立てないと分からないのではないかという発想が一つの原点にあります。生産における資本集約型か労働集約型かという問いの立て方に問題がある。そういう分析枠組みでインドは低賃金だからとか知識集約的なエリートが多いとか、そういうレベルで国際競争力があるかどうかをいくら分析しても、インド全体の成長がなぜ20年間持続したかということの説明にならないと思うんです。

そうではなく、生産ではなくて生存の基盤が上がったのが重要だと主張したいわけです。その上がり方も特徴的で、ものすごくまだらに上がっている。上がっただけを強調するのは、私の本意ではないんですけど、多様に上がっているわけです。

上がらない場合は成長は起こりません。日本や中国でも生存基盤は改善されました。ですから、なぜ生存基盤の改善がここ20年間続いているかという点が、インドの成長の鍵を握っているということが言いたいことの一つです。

もう一つは、生存基盤指数という考え方についてです。指数作成の試みはまだ始まったばかりで、厳しい指摘も受けています。しかし、例えば州間格差の問題を考えると、成長率格差で比べるのはまずいと思います。成長率格差だけだったら、中国はものすごくあるわけで、インドの大きな特徴ではないと思うんです。インドを特徴づける場合、生存基盤、つまり、高等教育といったことではなく、識字率や幼児死亡率、あるいは安全な飲み水の供給などといった点で州間格差がどう

なっているかということを議論すべきだと思います。

人間開発指数ベースの議論ではこの点の分析が弱い。生存基盤指数がちゃんと作成できたかどうかは別にして、これだけの多様性を持つインド経済が動いているのだから、もっと環境や生態を含めたところに焦点を当てた議論をしなければいけないと思います。

長崎 インド社会の格差の解消というか改善は、何といっても元不可触民の人たちの台頭によるところが大きいわけです。その一つの要因は、元不可触民の人たちが改革運動に取り組み、団結や教育を求めて今でも熱心に運動を続けていることにある。

そういう運動のなかで大事なことは、アンベードカルを見ても分かるように、ダルマという概念なんですね。それからガンディーの場合は、もちろんご存じのようにサティア、真理というのが大事だったわけですね。つまり運動の目標は社会主義革命ではないのです。そして、その解釈において、真理にはいろんな真理があるといった独創的な解釈が出てくる。そういう新たな解釈がそれぞれ加えられながら、そこに連綿とつながる伝統があるという見方に立ってプロジェクトを進めています。インドの伝統を生かすかたちで改革運動が続き、人々がそこに参集してゆく、そこにインドの伝統や社会運動の力があるということではないかと思います。

堀本 元不可触民の運動の側面から一つ言いたいのは、その成功の鍵は政治運動化に成功した点にあったということです。その理由は、単純に言えばインドに民主主義が根づいていたから。そういう状況があって初めてダリトも政治的な行動ができた。ダルマはもちろん大事かもしれないけれども、そういう仕組みがあったことも非常に重要だと思います。インドにおけるほかの社会運動も、それを組み込める装置のようなものが存在している。これがやっぱり、インドの面白いところかなと思っています。

長崎 それは、私もまったく賛成です。やっぱりガンディーなどの運動があったからこそ、アンベードカルの運動が続くわけですからね。

三尾 非常に多岐多端にわたり、いろんな課題も相互に言い合うなかで見えてきたと思います。プロジェクトの中間総括として、この座談会が今後のプロジェクトの活性化につながることを願っています。

今日は長時間どうもありがとうございました。

(座談会は平成 24 年 5 月 25 日、人間文化研究機構本部において実施)

